

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2023年5月24日	
所属部局・学年	野生動物研究センター・M1
氏名	西本千夏

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
幸島観察所、幸島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生動物・行動生態野外実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2023年5月15日 ~ 2023年5月21日 (7日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター附属 幸島観察所、技術職員、鈴木崇文氏 杉浦秀樹准教授、前田玉青氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
野生動物を対象とした生態、行動の研究およびフィールドワークの基礎的技術について学ぶことを目的として幸島観察所、幸島、都井岬で実習を行った。対象動物は、幸島に生息するニホンザルおよび都井岬に生息するウマで、各自設定したテーマで調査、発表を行った。
【スケジュール】 5/15 食料買い出し、観察所 5/16 幸島にてニホンザルの観察、野営準備 5/17 幸島にてニホンザルの観察、島内散策 (GPS、地図使用) 5/18 観察所に戻る。温泉にて身体を癒す 5/19 都井岬にて馬の観察、ドローン操縦 5/20 海辺付近の林散策、観察の発表 5/21 観察所の掃除、帰宅
【幸島】 主に浜辺にて、ニホンザルの観察を行った。1日目は、テーマ設定や個体識別を行うためサルを観察した。動きが早く、ムギを食べる際は顔が下に向いているので識別が難しかった。鈴木さんに詳しく特徴を教えてもらったが、顔を上げていた時さえどれも似ており識別は困難であった。2日目、私は、個体関係によるグルーミング時間の違いについて調べるために観察を行った。母子関係、兄弟、順位、雄雌のグルーミングの観察を行った。同様のテーマの同期の学生と協力してデータ集めを行った。観察する個体の特徴を識別し、追跡して観察を行った。追跡個体以外のグルーミングを観察する場合は、鈴木さんと呼んで個体を特定した。結局、最後までサルの識別はできなかった。鈴木さんの、識別スキルには感銘を受けた。島内では、GPSと等高線図を用いて散策を行った。自分の位置の把握や、高低差が少ないところを探しながら、歩くのは大変であった。しっかりとした道があるわけではないので、滑ったり、転んだり、木に頭をぶついたり山のフィールドは大変であると実感した。また、自分の位置を把握しながら、対象個体を追っていくのは至難のわざだと思った。方位磁石と地図を用いて歩いていく技術も学ぶことができ、GPSが切れても帰れる技術を習得した。フィールドに行く際は、地図を持ち歩き、読む力は大事だと思った。島内散策は、タヌキのためフンや、イヌマキなどのこれまで知らなかった植物を見ることができ、面白かった。植生やタヌキの食性も考察することができ、興味深かった。 私にとって初めての無人島生活であり、電気のない島で、飯盒炊爨など野外生活に必要な技術を多く学ぶことができた。苦労したのは、ご飯の炊き方であった。ご飯の炊き方では、中身のご飯全ておいしく炊くための技術を習得できた。3日目の朝は、生徒だけでおいしく炊くことができた。また、寝袋で寝るのも今回が初めてであった。寝袋の中は想像以上に暑苦しく、入って寝ることができず、掛布団として使用した。幸島では、明かりが全くなかったので、星空を綺麗にみることができ感動した。
【都井岬】 都井岬では、生まれたばかりの子馬やグルーミングを行う個体を間近で観察することができた。他にも、

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

群れから離れすぎた個体が呼んで、群れの個体が呼び返す場面も見ることができた。警戒心が全くなく、子馬に近づいても親は気にしていなかった。馬は、想像以上に小さく、やせ細っている個体が多く見られるなど、野生馬は飼育馬とは全然違うことを実感した。また、糞も水分が少なく感じられ、食物の水分を絞り取るだけ絞り取って、体に吸収している印象を受けた。

馬でも個体識別を行ったが、ニホンザルよりも識別を行いやすかった。番号が烙印されているのですぐに判別することができた。烙印がない個体でも、色味や体格が違い、性別もすぐ見て判別できたので観察しやすかった。しかし、都井岬は丘が急であったため、馬を見つけ、その場所に行くのに時間、労力が必要であった。フィールドでの研究はどれも簡単ではないと感じた。ポスドクの前田さんが同行して下さったため、ドローンを使用し、上空からも馬の群れを観察することができた。ドローンのおかげで、遠く離れた群れも行くことなくカメラで観察できるので、大変便利であった。初めてドローンを操縦したが、手元のカメラを見ながらの操作は難しかった。ドローンの音が大きかったが、馬は気にする様子もなく、むしろトンビといった鳥が寄ってきていてぶつからないか心配であった。都井岬では、他にもアナグマを観察することができた。

幸島と都井岬という環境が違うフィールドを経験することができ、フィールド特有の調査方法を学ぶことができた。観察スキルを身に付けるのみならず、野生動物を追跡し、研究していく面白さを体感することができてよかった。また、調査活動以外にも他の人たちと協力し合い活動することができ、お互い仲を深めることができ、楽しい実習となった。



グルーミング中のニホンザル



観察に使用したドローン



グルーミング中の御崎馬

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

実習の引率と丁寧なご指導をしてくださいました杉浦先生、鈴木様、前田様に深く感謝申し上げます。